



●第 53 回全国大会の終了報告とお礼

日本色彩学会第 53 回全国大会 [名古屋] '22 を 6/25 (土)・26 (日) に椋山女学園大学星が丘キャンパスとオンラインのハイフレックス方式で開催し、230 名の方々にご参加いただき、成功裡に終えることができました。

現地開催の再開を象徴するテーマ『カラー・レジリエンス Our transition toward COLOR resilience』のもと、多くの学会員が名古屋の地で久々の対面での再会を果たしました。

66 件の研究・作品発表では熱意のこもったプレゼンとディスカッションが繰り広げられ、2 件の招待講演・特別学術講演は大勢の聴講者が熱心に聴き入り、大変好評でした。

一方、仕事・家庭・体調などの事情で現地へ足を運びにくい方々にもオンライン参加の機会を提供することができ、今後の開催形式の道筋が見えた大会だったともいえます。

ハイフレックス開催の準備には多くの時間と労力を費やし当日も苦労が絶えませんでした。運営ノウハウや経験は学会の財産となることでしょう。参加者の皆様のご協力に心から御礼申し上げます。

(全国大会実行委員会・広報)

源氏物語の色 -37 「若菜下」 - その 2

光源氏四十七歳の正月十九日、六条院に住まう女性により催された女楽（おんながく）で明石の方は琵琶、紫の上は和琴（わごん）、明石の女御（姫君）は箏（そう）、女三の宮は琴（きん）を弾じた。

寝殿の正面の客間に、外からは姿が見えないようにして、それぞれの楽器の前に几帳で隔てて坐する女君たちを光源氏は覗いて廻り、その姿を花になぞらえた。

桜（表白・裏紅）の細長を着けた二十一歳の正夫人女三の宮は青柳に、紅梅（表紅梅、裏蘇芳または紫）の御衣（おんぞ）を着けた明石の女御は藤の花に、そして、葡萄染めであろう濃い紫の小袿、薄蘇芳の細長を着けた三十七歳の紫の上の姿は桜に喩えられる。柳（表白、裏青または緯糸白、経糸青）の織物の細長に、萌黄の小袿、羅（うすもの）の裳を着けている明石の君は花橘に見立てている。

当時、貴婦人の姿を直接見る事が出来る男性は、親兄弟か夫または恋人に限られていた。唯一この場面をみる事が許される光源氏のその視線を介して優雅で華やかな情景が目浮かぶようである。

(平山和香子)

● 金色夜叉の色名 -1

尾崎紅葉 (1868~1909) は明治時代の著名な小説家の一人であり、未完の「金色夜叉 (明治 30 年~)」は、彼の代表作でもある。

飛鳥・奈良時代から江戸時代までに、作られ、使われた色名を「日本の伝統色名」とすれば、明治時代以降の色名は「現代色名」と呼んでもいいだろう。

「金色夜叉」のあらすじは、貧乏学生の間貫一は鳴沢宮と許婚であったが、宮は貫一を裏切り、銀行家の富山唯継と結婚することにした。貫一は月の熱海の海岸で宮と会い、確認して怒り、「来年の今月今夜、僕の涙でこの月を曇らして見せる！」と叫び行方をくらまし、貫一は復讐のため高利貸となり成功する。結婚後、後悔した宮は許しを請うが貫一は受けつけなかった。愛欲と金銭欲との葛藤を描いた長編小説である。

小説中に出てくる色名を、1) 女性の着物、装身具、持ち物の色。2) 男性の着物、装身具、持ち物の色。3) 人物の肌の色や髪や鬚や化粧などの色。4) 自然描写の色の表現。5) その他の色の表現の場合に 5 分類して、抽出作業を行った。以下の号で、明治時代の文学作品「金色夜叉」に使われた色名の実例を紹介していきたい。(続く) (永田泰弘)